

一切経音義全文データベースの構造化

李 乃琦 (東京大学 人文社会系研究科)

劉 冠偉 (北海道大学 文学研究科)

本研究では、日本にのみ現存する一切経音義の9種類の古写本を利用し、全文翻刻・入力した上で、「一切経音義全文データベース」を構築した。それに基づいて、全文テキスト翻刻・データベースの構築・インターフェース公開・データベース構造化と利用について論じる。主に、日本古写本一切経音義の特徴・価値、古写本の翻刻方針・データの分類・構成、公開のための準備、構造化の計画について述べる。

Structuralization of Yiqiejingyinyi Full-text Database

Naiqi Li (Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo)

Guanwei Liu (Hokkaido University)

In this research, we constructed "Yiqiejingyinyi Full-text Database" that contains nine types of ancient manuscripts existing only in Japan. Based on that, we will discuss the full-text transcription, database construction, interface release, database structuralization and usage. Mainly, we will describe the features and values of Japanese old manuscripts, the reprint policy of ancient manuscripts, the classification and organization of data, preparation for release, plan for structuring.

1. まえがき

一切経音義は、7世紀に唐の玄奘によって編纂され、中国に現存する最古の仏典音義である。唐代に玄奘はインドから大量の仏典を将来した。それらの仏典を翻訳するために、長安に「訳場」を設け、僧侶の中から知識のある者を選んだが、その中でも玄奘は唯一の「字学大徳」であった。玄奘は仏典に難字難語が多数存在することを意識し、仏典翻訳に並行して「一切経」の音義の編纂を行った。

それがいわゆる一切経音義であり、全25巻で約400,000字、450部以上の仏典から8,000以上の項目が収録されている。内容的には、漢訳仏典についての解説のみならず、唐代の漢字音も反映するので、中国語学の研究に於いても、貴重な資料である。そのほか、450以上の仏典を収録することから、当時の仏典の実態を知る手がかりとして、仏教学においても重要なものである。

一切経音義は奈良時代に伝来し、盛んに書写された。現在一切経音義は中国に現存する木版に対して、写本は日本にしか残されていない。そのほか、大英図書館・フランス国立図書館などに一切経音義の敦煌・吐魯蕃出土の断片群が保管されている。また、一切経音義は後代の仏典音義に大きな影響を与えた。その影響は中国にとどまらず、

日本でも平安時代以降の辞書編纂に際しては頻繁に利用された。

従来、一切経音義は、版本については研究が重ねられてきたが、写本は日本にのみ所蔵され、研究が多くとは言えない。日本に現存する一切経音義古写本は残巻数と内容において多少異なるものの、幾つかの系統に分けられると想定される。上田(1981)では4種類を紹介し、佐々木(2014)では、2006年に新たに公開された5種類も含めた一切経音義の巻第五について、諸本の系統を分析した。そこで個別の巻の系統については分類されたが、一切経音義全体を対象とした系統分類は未だ行われていない。

以上の問題を解決するために、筆者は日本に現存する9種類の一切経音義古写本を対象とし、全文を翻刻・入力した上で、「一切経音義全文データベース」を構築した。(李2016c, 2018a, 2018b)

従来の辞書研究では、手書きのカードで情報を記録・整理し、多くの人員と大量の時間が必要だった。近年、データベースの発達に伴い、理系にとどまらず、人文学においてもデータベースを活用している研究成果も少なくない。特に辞書類の文献のデータベースにおいては、誰でもオンライン上で閲覧できる¹。

¹ 例：中国哲学書電子化計画・字書：
<https://ctext.org/etymology/zh>

一切経音義は、その全文テキストがすでにインターネットで公開されてきた。(参考文献 20, 21) しかしながら、それは、版本である高麗本と磧砂本を利用したものである。版本と写本とは、系統も異なるし、内容にも大きな差異がある。次にその一例を挙げる。

例 1 <抒氣> 卷第四 華手經

時汝，除呂二反。『廣雅』：抒，𠂔也，溲出也。𠂔，餘紹反。(七寺本・金剛寺本・西方寺本・広大本・正倉院本)

時汝，除呂二反。『廣雅』：抒，𠂔也，溲出也。『説文』：抒，挹也。挹對酌也。挹音於入反。𠂔，餘紹反。(高麗本・磧砂本・宮内庁蔵宋版)

この例では、版本である高麗本・磧砂本・宮内庁蔵宋版の注文が一致する。しかしながら、古写本である七寺本・金剛寺本・西方寺本・広大本・正倉院本には傍線部の引用が見られない。そのため、現在公開されている一切経音義データベースを利用して、一切経音義の日本古写本を検索するのは、不適切だと思われる。

一方、一切経音義全二十五卷(高麗本)には約 9,000 の項目がある。そのほかに、9 種の古写本がいずれも残巻であるが、合わせて 103 巻分が存する。これは、膨大な文字量を持つ文献だと言えるだろう。さらに、諸本間には一致する内容が大半を占め、それ以外の異文は多様な形式で残されている。文献の量的な面から言っても、また諸本間の比較を効率的にするためにも、データベースを構築することは必要である。

また、データベースの構築・公開にとどまらず、中国語学・仏教学・文献学などの研究者に向けて、検索の精密性・利便性を向上するために、注文を内容によって、分類・構造化する必要がある。

本研究では、既に構築した「一切経音義全文データベース」を土台とし、注文テキストのマークアップにより、構造化を行う。精密的な構造によって、よりよく検索・分析を可能とする。

2. 先行研究と研究対象

2.1 先行研究

1 山田(1932)は日本古写本の大治本が宋版系ではなく、高麗本系であることを指摘した。さらに巻第一について諸本対照の結果を示し、大治本には高麗本系よりも古い一切経音義の本文が残っていることを明らかにした。

2 上田(1981)は一切経音義の日本古写本(大治本・正倉院本・広島大学所蔵本・天理図書館本・

高麗蔵経本)と中国版本(磧砂蔵経本、叢書集成所収本、慧琳音義所拠本)とを比較し、日本の諸本は、中国の版本とは別の系統に属することを明らかにし、日本独自の系統がある可能性を示唆した。

3 箕浦(2006)は金剛寺本・七寺本・東京大学本・西方寺本の書誌情報について説明している。その中では金剛寺本が大治本に近く、七寺本が高麗本に近いことを指摘した。また西方寺本が他の写本より石山寺本に近いことも指摘した。ただし、上に挙げた諸本の親疎関係については特に根拠を示していない。

4 徐時儀(2009)は、日本に現存する一切経音義古写本の系統を検討した。収録された経目においては、金剛寺本・七寺本・西方寺が高麗本と同じ系統であり、注文においては、七寺本が高麗本に近く、西方寺本・金剛寺本が磧砂本に近いと論じた。また、徐氏は元々開寶藏初刻本と契丹藏との間に一種類の一切経音義古写本が存し、日本現存の写本はその古写本に基づいてできたものであると論じた。その上で、西方寺本・金剛寺本が先に成立し、その後、高麗本と七寺本がそれらを底本として編集されたと論じた。筆者は徐氏の研究結果には再考の余地があると考えている。

5 佐々木(2014)は2006年に公開された5種類の写本も含めた一切経音義巻第五における本文と目録との経名不一致について論じ、現存する一切経音義巻第五の経名から見た場合、日本古写本は高麗本に近く、宋版はそれと遠いことを指摘した。さらに、現存する巻第五に、目録と本文の経名とが一致しないものがあることについて、各巻の目録が音義本文と独立して書写されたためと説明づけた。

以上、これまでの研究により、一切経音義の日本写本と中国版本が別々の系統に属することが明らかになった。また、個別の巻の系統分類については、これらの先行研究により解明されたが、他の巻も含めた一切経音義日本古写本全体を対象とした系統分類は未解決のままである。本論では、「一切経音義全文データベース」を構築し、それらの問題点について検討する。

2.2 研究対象

本論では、完本である高麗本と日本に現存する一切経音義古写本を研究対象とする。使用している諸本は次のとおりである。

(1) 高麗本：一切経音義高麗蔵経本(全25巻、『高麗大蔵経』東国大学校, 1976年)

(2) 金剛寺本：一切経音義大阪天野山金剛寺蔵本(鎌倉時代書写。巻第一～四, 六, 七, 九～二十一, 二十四, 二十五の21巻が現存する。)

(3) 七寺本：一切経音義名古屋稲園山七寺蔵本（平安時代書写. 巻第一～十，十二～十四，十六～十八，二十一，二十三～二十五の20巻が現存している. また，巻第十五は東京大学史料編纂所に所蔵されているので，合わせて21巻現存する.）

(4) 大治本：一切経音義宮内庁書陵部蔵法隆寺一切経大治三年（1128年）写本（平安時代書写. 巻第一，二，九～二十五の19巻が現存する.）

(5) 西方寺本：一切経音義奈良県従是山西方寺蔵本（鎌倉時代書写. 巻第一，三～六，九，十三，二十一，二十五の9巻が現存する.）

(6) 広島大学本：一切経音義広島大学国語学研究室蔵石山寺一切経安元年間（1175～1177年）写本（平安時代書写. 広島大学に現存する巻第四と出所を同じくする写本が京都大学文学部国語学国文学研究室に2巻，天理図書館蔵本に1巻，反町弘文荘賣立品に1巻（現蔵不明），大東急記念文庫蔵本に1巻存在している.）

(7) 天理図書館本：一切経音義天理図書館蔵石山寺一切経院政期写本（巻第九，第十八が現存する. 巻第九が院政期の写本. 巻第十八が鎌倉時代の写本である.）

(8) 京都大学本：一切経音義京都大学文学部国語学国文学研究室蔵本（巻第六，七が現存する. 石山寺本の一部である.）

(9) 東京大学本：一切経音義東京大学史料編纂所蔵本（巻第十五のみ現存する. 七寺一切経の一部である.）

他に，正倉院本一切経音義（正倉院聖語蔵本：平安時代書写）を参考資料とする.

以上により，現存する一切経音義古写本の項目数は表1のように示される.

表1 9種類の一切経音義日本古写本の項目数¹

巻	麗	金	七	大	西	広	京	天	東
1	407	806	405	807	290 ※				
2	442	441	440	441		441			
3	387	383 ※	388		235 ※	403			
4	485	484	485		484	484			
5	489		488		418 ※	472			
6	429	428	429		191 ※		438		

¹ 諸本の略称：麗：高麗本，金：金剛寺蔵本，七：七寺蔵本，大：宮内庁書陵部蔵本，西：西方寺蔵本，広：広島大学図書館蔵本，京：京都大学蔵本，天：天理図書館蔵本，東：東京大学蔵本
※：残巻である。
空白：現存しない。

7	422	422	422				422		
8	410		410						
9	287	286	287	286	150 ※			286	
10	223	222	223	222					
11	369	370		370					
12	386	381	384	380					
13	369	369	369	369	268 ※				
14	384	384	384	384					
15	404	333		333					334
16	306	306	306	306					
17	284	282	284	282					
18	338	312	338	312				313	
19	293	292		290					
20	472	471		471					
21	304	304	304	305	107 ※				
22	491			552					
23	379		379	379					
24	295	294	295	294					
25	260	259	260	259	259				
計	9315	7446	7280	7042	2402	1800	860	599	334

3. 「一切経音義全文データベース」の構築

一切経音義の内容にはいくつかの情報が含まれている. それらを図で表現すれば，次のとおりである.



図1 一切経音義の項目の要素構成

一切経音義の巻次：各巻の最初に巻次を示す。一切経音義の場合は、一から二十五までである。

各経の経名：一切経音義の一巻にはいくつかの仏典が含まれている。それらの経の名称である。

各経の巻次：各経もいくつかの巻に分けられており、それらの巻についても巻次で示す。

所在：本論では、一切経音義の掲出語と注文を組み合わせたものを「項目」という。ここでいう所在とは、項目が記載されている頁数である。

掲出語：仏典から抽出され、解釈を付される難字難語のことを指す。

注文：掲出語に施された注釈文であり、字体注・音注・義注がある。

一切経音義の注文は大別して、音注・字体注・義注の三つの要素に分けられる。現段階では、各要素を次のように分類した（図2参照）。

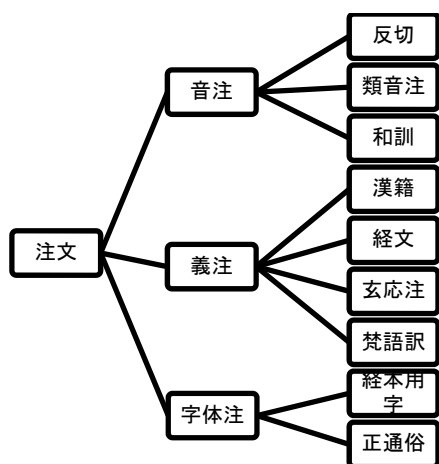


図2 一切経音義注文の構成

3.1 データベースの構成

ここで、「阿氏多」（巻第二十五）を例として、データベースの構成を示す。

例2<阿氏多>巻第二十五 阿毗達磨順正理論

常尔反。此云無勝。舊言阿嗜多，或作阿逸多，皆訛也。是彌勒今生名也。

表2 七寺本一切経音義データの構成

ランク	内容	例
ID	古写本の略称と所在頁数・行数	YND114502
巻	一切経音義に所属する巻	巻第二十五

経名・巻	この項目が典拠する経名と巻数	阿毗達磨順正理論・第一巻
項目 高麗本	高麗本を基準として、高麗本と異なる項目があれば、古写本で出現した項目で補足する	阿氏多
項目 古写本	掲出語	阿氏
所在	各写本での所在頁	1145
注文	高麗本を基準として、高麗本と異なる内容を<q></q>で明示する。	<q>多</q>常尔反。此云無勝。舊言阿嗜多或作阿<q>免</q>多，皆訛也。是彌<q>難</q>勒今生名也。

以上のように、ある項目を処理するために、いくつかの部分に分け、情報を別々に記入する。それにより、多方面から写本の比較と整理が可能になる。

次の表では、一切経音義各本の ID について説明する。各本の ID は次の三つの部分に分けられる。

- ① Y は一切経音義の略称である。
- ② 続く二つのアルファベットは各本の日本語読みの略称である。
- ③ 6桁の数字は前の4桁が項目の所在頁数であり、後の2桁が行数を表す。

表3 一切経音義各本の ID 対照表

ID	内容	例
高麗本の項目		阿氏多
YKR	高麗本 ID	YKR052002
YND	七寺本 ID	YND114502
YKN	宮内庁本 ID	YKN071102
YKG	金剛寺本 ID	YKG046402
YSH	西方寺本 ID	YSH132302
YSS	正倉院本	(空)
YTT	天理図書館本	(空)
YHD	広島大学本	(空)
YTD	東京大学本	(空)
YKD	京都大学本	(空)

3.2 翻字の方針

一切経音義日本古写本において、本文の翻字は康熙字典体に従うことを原則とする。それらの符号化できない掲出字は IDS 処理を行う。2017年6

月に公開された 10.0 版までに、使われる漢字が 8 万近くになっている。

IDS は、漢字を複数の「部品」の集合体として捉え、これら「部品」の合成により 1 文字の漢字を表現しようとするものである。ここで、CJK 統合漢字と IDS について、Unicode Standard 7.0 を元に説明する。

Unicode によって実装可能な漢字 74,605 字の内訳は、基本多言語面の CJK 統合漢字が 20,941 字、CJK 統合漢字拡張 A が 6,582 字、追加漢字面の CJK 統合漢字拡張 B が 42,711 字、拡張 C が 4,149 字、拡張 D が 222 字である(池田 2016)。

「一切経音義全文データベース」においてもユニコードで文字を保存・表現する。本データベースでは拡張漢字 B まで使用可能である。筆者の統計によれば、本データベースのユニコードのカバー率が 99% を満たす。「一切経音義全文データベース」では 79,894 字の掲出語と 832,341 字の注文が含まれている。それらの全文で出現した掲出語と注文について、ユニコードで処理可能な文字数をまとめたのが次の表である。

表 4 一切経音義全文データベースのユニコードのカバー率統計表

	掲出語 延べ数	注文 延べ数	掲出語 異なり数	注文 異なり数
CJK	76,434 (95.67%)	818,520 (98.34%)	4,911 (88.17%)	8,088 (92.60%)
拡張 A	1,479 (1.85%)	5,142 (0.62%)	209 (3.75%)	54 (0.62%)
拡張 B	1,664 (2.08%)	7,428 (0.89%)	305 (5.48%)	74 (0.85%)
IDS	317 (0.40%)	1,251 (0.15%)	145 (2.60%)	518 (5.93%)
計	79,894	832,341	5,570	8,734

データを入力する段階で、ユニコードの拡張漢字 B までで収録されていない漢字を IDS で表す。

それらを「/」で区別する。例えば、「**躰**」の字はデータベースで「/豆蓼/」の形式で保存する。

他に、原文の字体・字形の差異を特に問題とする場合は、可能な限り区別して翻字する。原文で示す句読点は筆者によるものである。

異文の判定においては、注文に使用されている「反、也、亦、故、曰」の有無を判断基準としない。また、「云、曰、言」の使い方も同様に、異文の判断基準としない。

以上により、翻字の方針を次のようにまとめる。

- ① 本論の翻字は、全て康熙字典体で示す。

② 入力できない字については、IDS 処理する。

③ 原文の略字においては、元の字体で入力する。例えば：正-雅

④ 省略符号「一」があれば、元の字で入力する。

⑤ 踊り字「々」があれば、そのまま入力する。

⑥ 句読点は筆者によるものである。

⑦ 一切経音義の注文は単行の注文と二行の割注の 2 種ある。これらの注を入力するには全て単行の注文として扱う。

⑧ 虫損により判読できない箇所は「□」で示す。それ以外の判読できない箇所は「■」で示す。

⑨ 異同がある内容については、下傍線で示す。

4 「一切経音義全文データベース」の活用

4.1 一切経音義についての研究

一切経音義日本古写本には巻ごとに存する写本の数や、内容に大きな差があるので、全体を単一の資料として検討するのは不適切であると思われる。そのため、「一切経音義全文データベース」により詳細に検討を加える。これにより明らかになったことを 2 例挙げる。

① 増訂

例 3 <習習> 卷第二 大般涅槃經

經文從犮作瘡，書無此字，近人迦之耳。（高麗本・七寺本・広大本）

經文從犮作瘡，書無此字，近人加之耳。和言加由之。（金剛寺本・大治本）

② 系統の異同

例 4 <怡懌> 卷第二 大般涅槃經

音以之反。『爾雅』：怡，懌，樂也。郭璞曰：怡，心之樂也。懌，意解之樂也。（高麗本）

音。怡，懌，樂也。郭璞曰：怡，心之樂也。懌，意解之樂也。（七寺本）

音亦。『爾雅』：怡，懌，樂也。郭璞曰：怡，心之樂也。懌，意解之樂也。（金剛寺本・大治本・広大本）

以上のような検討を重ね、「一切経音義全文データベース」（図 3 参照）を利用して、日本古写本について経名と本文の内容により系統の分類を試みた。その結果、一切経音義日本古写本を三つの系統に分けることができた。すなわち、高麗本系統【高麗本，七寺本 A】，大治本系統【大治本，金剛寺本，七寺本 B】，石山寺本系統【石山寺旧蔵本（広大本，京大本，天理本卷第九），天理本卷第十八，西方寺本】である。一方，七寺

本は各巻によって系統が異なり、七寺本の書写形式と合わせて検討した結果、七寺本が取り合わせ本であることを解明した。

版	巻	題目名・巻	頁	所在	註釋
金剛寺本	巻第 四	大灌頂經・第七	頁 90	版院反。《字書》：肉也。	
高麗本	巻第 四	大灌頂經・第七	頁 0405	版院反。《字書》：兼、牛肉也。今江准以北皆呼牛肉、以南皆曰肉。	
七寺本	巻第 四	大灌頂經・第七	頁 609	版院反。《字書》：兼、牛肉也。今江准以北皆呼牛肉、以南皆曰肉。	
西方寺本	巻第 四	大灌頂經・第七	頁 1234	版院反。《字書》：肉也。	

図3 「一切経音義全文データベース」の検索画面

5. 注文テキストのマークアップ

5.1 テキストをマークアップする意義

一切経音義の項目は複数字の掲出語とその注文からなるが、注文の内容は掲出語の全体または掲出語の一字（被注字）に対応する。注文の順序は掲出語の出現順と相違する場合もある。それらの対応関係は図4を参照されたい。

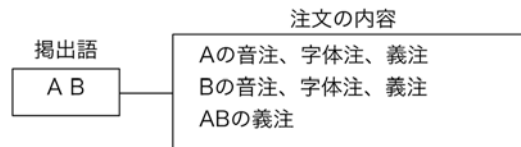


図4 項目構造

4.2 日本古辞書との照合

日本における辞書編纂の萌芽時代である平安期では、参照が可能な資料が限られていた。それらの資料には、中国からもたらされた文献が少ない。そのため、日本辞書の源流を遡る際に、中国文献の検証を避けることはできない。

古辞書の中で、代表的な平安時代の漢和辞書として広く知られているのは『新撰字鏡』と『類聚名義抄』である。新撰字鏡は現存する日本最古の漢和辞書であり、最初に一切経音義を利用して成立したものである。その後編纂された類聚名義抄は平安時代の音義書を集成するものであり、130種以上の出典が明記され、多数の文献を利用したことが窺える。その中で引用数が最も多いのが一切経音義である。よって、この両者の共通点として、注目すべき点は一切経音義の利用である。

筆者は、既に分類した一切経音義日本古写本の各系統を類聚名義抄と照合し、異文の内容について分析した上で、各系統の独自異文が類聚名義抄に見られることを明らかにした。各系統と類聚名義抄との対応する項目数とその中の不一致の項目数を数えたが、それによれば、不一致率の順は多い順に高麗本系統>石山寺本系統>大治本系統である。これによって、類聚名義抄が編纂された時、利用された一切経音義は大治本系統に最も近いことが明らかになった。(李 2016a)

一切経音義と新撰字鏡との照合を行う場合、新撰字鏡注文の出典が明記されていないため、一切経音義の独自注文がある項目を取り上げて比較した。その結果、新撰字鏡の依拠本は高麗本系統に近いことが明らかになった。(李 2017b)

一切経音義の内容や諸本の研究にはこのような項目構造に対応できる表示・検索システムが求められている。それを実現するために、注文を適切にマークアップすることが必要である。

5.2 独自のタグセット

本研究の構造化はXMLマークアップを用いて行う。文系研究資源によく利用されているものにTEIがあり、仏典に応用する例は多く見える。しかし、前節で述べたように、今回のマークアップは項目構造の表示と効率的な検索のためであるので、本研究におけるマークアップは次の三段階に分けて進めたい。

第一段階では注文テキストにある「、」「。」によって要素を区切る。要素を大まかに音注、字体注、義注としてタグを付与する。諸本の相違を表すタグ<q>はその各タグの下位タグとして保留する。利用するタグは表5のように示す。

表5 要素タグセット

タグ	要素
yin	音注
ziti	字体注
yi	義注

例5 <冠花鬘> 卷第二十四 阿毗達磨俱舍論
古玩反。冠猶著也。下梵言摩羅、此譯云鬘、音莫班反。案西國結綬師多用蘇摩那花行列結之、以爲條貫、無問男女貴賤、皆此莊嚴、或首或身、以爲飾好、則諸經中有‘花鬘’、‘是天鬘’、‘寶鬘’等、同其事也。字從髟。曼聲。曼音彌然反。

```

<yin>古玩反。</yin>
<yi>冠猶著也。</yi>
<yi>下梵言摩羅、</yi>
<yi>此譯云鬘、</yi>
<yin>音莫班反。</yin>
<yi>案西國結縵師多用蘇摩那花行列結之、</yi>
<yi>以爲條貫、</yi>
<yi>無問男女貴賤、</yi>
<yi>皆此莊嚴、</yi>
<yi>或首或身、</yi>
<yi>以爲飾好、</yi>
<ziti>則諸經中有‘花鬘’、</ziti>
<ziti>‘是天鬘’、</ziti>
<ziti>‘寶鬘’等、</ziti>
<ziti>同其事也。</ziti>
<yin>字從髟。</yin>
<yin>曼聲。</yin>
<yin>曼音彌然反。</yin>

```

第二段階ではタグの属性“ref”を利用して、各注文要素を被注字と関連付ける。“0”は掲出語の全体，“1”“2”“...”は対応の文字出現順となる。次に例を示す。

```

<yin ref="1">古玩反。</yin>
<yi ref="1">冠猶著也。</yi>
<yi ref="3">下梵言摩羅、</yi>
<yi ref="2">此譯云鬘、</yi>
<yin ref="3">音莫班反。</yin>
<yi ref="0">案西國結縵師多用蘇摩那花行列結之、</yi>
<yi ref="0">以爲條貫、</yi>
<yi ref="0">無問男女貴賤、</yi>
<yi ref="0">皆此莊嚴、</yi>
<yi ref="0">或首或身、</yi>
<yi ref="0">以爲飾好、</yi>
<ziti ref="0">則諸經中有‘花鬘’、</ziti>
<ziti ref="0">‘是天鬘’、</ziti>
<ziti ref="0">‘寶鬘’等、</ziti>
<ziti ref="0">同其事也。</ziti>
<yin ref="3">字從髟。</yin>
<yin ref="3">曼聲。</yin>
<yin ref="3">曼音彌然反。</yin>

```

第三段階では連続している「,」で終わる同様なタグを合併する。次はマークアップしたデータの一例である。

```

<yin ref="1">古玩反。</yin>
<yi ref="1">冠猶著也。</yi>
<yi ref="3">下梵言摩羅、</yi>
<yi ref="2">此譯云鬘、</yi>

```

```

<yin ref="3">音莫班反。</yin>
<yi ref="0">案西國結縵師多用蘇摩那花行列結之、以爲條貫、無問男女貴賤、皆此莊嚴、或首或身、以爲飾好、</yi>
<ziti ref="0">則諸經中有‘花鬘’、‘是天鬘’、‘寶鬘’等、同其事也。</ziti>
<yin ref="3">字從髟。</yin>
<yin ref="3">曼聲。</yin>
<yin ref="3">曼音彌然反。</yin>

```

5.3 マークアップするツール

一切経音義の構造は部首分類体辞書と類似しているため、日本古字書に対応しているマークアップ・ツール **tagzuke** の修正によって、専用ツールを作成する。それを利用してマークアップを行う予定である。

6. あとがき

一切経音義日本古写本の特徴・系統分類を解明するために、「一切経音義全文データベース」を構築した。それに基づいて、一切経音義のみならず、日本古辞書についての研究も可能となる。

一切経音義の内容や諸本に関する研究、データの効率的な利用を目的として、このような構造化によって、一切経音義の掲出語を一文字単位で抽出・分析することが可能となる。音注、字体注、義注を諸本間で比較することより、本データベースのさらなる活用が期待できる。また、多分野の研究者向けの検索システムによって、「一切経音義全文データベース」の利用範囲を格段に拡大することを目指す。

参考文献

古籍

高麗藏経本：『高麗大藏経』、東国大学校、1976年。

名古屋七寺蔵本・大阪金剛寺蔵本・西方寺蔵本・東京大学蔵本・京都大学蔵本：『日本古写経善本叢刊第一輯「玄奘撰一切経音義二十五卷」』国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集発行、2006年。

広島大学蔵本・大治三年蔵本・天理図書館本：『古辞書音義集成7～9 一切経音義(上)(中)(下)』、汲古書院、1981年。

論文・著作

- 1) 池田証壽: 図書寮本類聚名義抄と玄応音義との関係について, 国語国文研究 88, pp. 15-32(1991).
- 2) 池田証壽, 李媛, 申雄哲, 賈智, 齋木正直: 平安時代漢字字書のリレーションシップ, 日本語の研究 12(2), pp. 68-75(2016).
- 3) 上田正: 玄応音義諸本論考, 東洋学報 63(1-2), pp. 1-28(1981).
- 4) 于亭: 玄応一切経音義版本考, 中国典籍与文化 4, pp. 15-32(2007).
- 5) 小林芳規: 一切経音義解題, 古辞書音義集成「一切経音義(下)」, (1981).
- 6) 佐々木勇: 玄應撰『一切経音義』巻第五における本文と目録との経名不一致について, 訓点語と訓点資料 133, pp. 50-70(2014).
- 7) 徐時儀: 玄応《衆経音義》研究, 中華書局(2005).
- 8) 徐時儀: 玄應和慧琳的《一切経音義》研究, 上海世紀出版集團(2009).
- 9) 張娜麗: 京都大学文学部国語学国文学研究室蔵玄応撰『一切経音義』について, 日本古写経善本業刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五巻」, pp. 37-40(2006).
- 10) 山田孝雄: 一切経音義刊行の顛末, 一切経音義二十五巻, 1932.
- 11) 箕浦尚美: 金剛寺本・七寺本・東京大学史料編纂所・西方寺蔵玄応撰『一切経音義』について, 日本古写経善本叢刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五巻」, pp. 15-36(2006).
- 12) 劉冠偉, 李媛, 鄭門鎬, 張馨方, 池田証壽: 部首分類体日本古辞書の項目構造の多様性に対応したマークアップ・ツールの開発, じんもんこん 2017 論文集, pp. 97-102(2017).
- 13) 李乃琦: 図書寮本『類聚名義抄』における玄応撰『一切経音義』の依拠テキスト『一切経音義』巻第四を中心に, 訓点語と訓点資料 137, pp. 115-132(2016a).
- 14) 李乃琦: 日本古辞書與玄應撰《一切経音義》, 《佛経音義研究》, 上海辞書出版社, pp. 124-139(2016b).
- 15) 李乃琦: 玄応音義に関する研究史と課題, 北海道大学大学院文学研究科研究論集 16, pp. 85-98(2016c).
- 16) 李乃琦: 玄応撰『一切経音義』諸本系統から見た P. 2901, 汲古第 72 号, pp. 13-19(2017a).
- 17) 李乃琦: 一切経音義独自項目から見た新撰字鏡の依拠本, 第 116 回訓点語学会研究発表会口頭発表(2017b).

18) 李乃琦: 從《一切経音義》経目名看其系統分類, 東亜文献研究 21, 韓国交通大学東 ASIA 研究所, pp. 119-134(2018a).

19) 李乃琦: 一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究, 北海道大学学位論文(博士), (2018b).

データベース

20) 漢学文典(大唐衆経音義・衆経音義・一切経音義, 徐時儀校注)

<http://tls.uni-hd.de/xuanying.html>

21) 仏典辞書数位検索系統(玄応『一切経音義』慧琳『一切経音義』, 希麟『一切経音義』)

<http://cprg.esoe.ntu.edu.tw/cyj/index.py>

付記

本発表は日本学術振興会特別研究員奨励費「一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究」(代表者: 李乃琦, 課題番号 17J02838) の成果の一部である。